

Title	黄帝伝説異聞
Sub Title	On the Yellow Emperor (黄帝) legends : a comparative study between the middle east and China
Author	森, 雅子(Mori, Masako)
Publisher	三田史学会
Publication year	1997
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.66, No.4 (1997. 7) ,p.163(639)- 183(659)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム中国神話学の現在
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19970700-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

黄帝伝説異聞

森 雅子

(一)

中国民族の共通の始祖として信じられ、語り伝えられてきた黄帝については、『尚書』『詩経』『論語』『孟子』といった古書には見えず、比較の後になって編纂された『山海経』『莊子』『穆天子伝』等に至って始めてその名が登場してくるところから、これを戦国時代の末(前三、四世紀頃)に鄒衍すうえんらが提唱した五行説・五行思想の中から発生した、いわば人工的な「作りもの」の存在であったとする説と、⁽¹⁾上帝として、とりわけ皇天上帝として古くから崇拜されていたものから転化、独立した存在とする説とに⁽²⁾二大別して今日まで様々な論究が試みられてきた。

例えば、森三樹三郎氏は「鄒衍以前の文献には、黄帝

の名が全く見えないといふに於ては、黄帝が五行説の要請に基づいて創作されたことには最早や疑うべき余地がないかに見える」と断定し、⁽³⁾一方、丁山氏は「黄帝とは『皇天上帝』の別名であり、顧頡剛らの古史辨が首めてその蒙を發いた」と述べ、全面的に黄帝即皇天上帝説を支持している。⁽⁴⁾但し、白川静氏は「秦の襄公(前七七七一七六六)がはじめて西時を作り白帝を祀り——(文公、宣公を経て)靈公(前四二四—四一五)は呉陽の上時に黄帝、下時に炎帝を祀った」こと等から、黄帝に始まる「五帝説はもと秦に起つたものである」と推定し、更に中国の古帝王説話には様々な外来的要素——例えば、バビロニアで成立した天文曆法や占星術が伝来して「木星の周期を示す十二辰や二十八宿説、またそのような新しい天文学や占星術によって列国の主神を作り出した分

野説などが生まれ」た可能性を指摘し、間接的にはあるが前述の二説を批判している⁽⁵⁾。

実は、私自身この二説には懐疑的であり、第一の黄帝を戦国時代の五行説・五行思想の中から発生したとする説に関しては、果たして諸子百家の一派にしか過ぎない田駢、鄒衍の徒の創作した存在(黄帝)が、後に見るように全中国民族の始祖となり得るだろうかと考えている。いいかえれば、それは自らの学説の正統性を主張し、喧伝して止まなかった諸子百家が、他の学派が創作した黄帝を容認し、彼を始祖とする古帝王の系譜の一元化を計るなどということがあり得るだろうかという疑問である。また、第二の黄帝を「中国の最高神である『皇帝』⁽⁶⁾上帝から分離・独立した存在」とする説に関しても、その分離や独立を生ぜしめた要因は何であつたのか——単なる Emperor から Yellow Emperor となり、その名で(固有名詞として)定着し、擬人化されていく契機は何であつたのかという疑問がある。実際、戦国時代以降の文献に登場してくる黄帝の事績は、到底それ以前の上帝や皇天上帝の及ぶところではなく、両者を直線的に捉えることは不可能である。

これらの疑問を解明するにあたって、私は第一の説の

場合には、たとえ黄帝が他の東西南北に配置された諸帝(太皞、炎帝、少皞、顓頊もしくは青帝、赤帝、白帝、黒帝)とセットを組み、木火土金水といった五行・五元素を体现化するために創作された存在であつたとしても、彼をして中央の帝たらしめ、中国民族の始祖たらしめるには、学派を超越した強烈なインパクトが必要であり、同時に第二の説の場合にも、黄帝が上帝から分離・独立し、しかも華々しく活躍するためには、何らかの外的要因・契機が必要だつたのではないか、そしてその学派を超越したインパクトもしくは外的要因・契機とは「エヌマ・エリシュ」と呼ばれるバビロニアの創成神話だつたのではないかと考えた。

というのも、「エヌマ・エリシュ」は言語や文体から判断して、前二千年紀初頭の原本にまで遡り得ると同時に、はるか後世までバビロンの新年祭で朗唱され続けた極めて長命な祭儀文書であり、更に近隣の諸国・諸民族に影響を与えたという点では「ギルガメシュ叙事詩」にも匹敵する一大文学作品であつたからである。例えば、「エヌマ・エリシュ」の中でマルドゥクが海水のティアマトに象徴される「原初の混沌」を打ち破り、「秩序」を確立するというテーマは、ウガリットではバアルによ

るヤムやモトとの闘争と勝利の中で、またイスラエルでは「あなた(神)はみ力をもって海をわかち、水の上の龍の頭を砕かれた」(詩篇七四・一三)とか「その日、主(神)は堅く大いなる強いつるぎで逃げる蛇レビヤタン(神)を罰し、また海における龍を殺される」(イザヤ書二七・一)という記述の中で繰り返されている。更に、「エヌマ・エリシュ」の冒頭の部分で語られている神々の系譜——その誕生と世代交代は、ヒツタイトでは「クマルビ神話」となり、ギリシアではヘシオドスの『神統記』へと受け継がれ、またイスラエルの人々も「古代メソポタミアの創成神話を知っており、それらを意識しつつ、彼ら独自の『原初史』(創世記一―一二)をまとめあげた」ことが、近年における「ダウンヌの神統譜」の発見や読解とあいまって立証されつつある⁽⁸⁾。

従って、以下に試みるのはこの「エヌマ・エリシュ」が西方においてはヒツタイト、ウガリット、イスラエル、そしてギリシアの神話や叙事詩に多大の影響を与え続けたように、東方においても春秋・戦国時代(前八―前三世紀)の中国に伝来し、黄帝伝説の成立に関与したのではないかという仮説の提示であり、「エヌマ・エリシュ」の主人公マルドゥクと黄帝との直截な比較である⁽⁹⁾。

(二)

本論において、黄帝伝説との比較史料として、いわばその原型の一つとしてとり上げるバビロニアの創成神話は、一八七五年大英博物館のジョージ・スミスによって始めて公にされて以来、多くの学者達の注意や関心を引きつけ、夥しい数の翻訳や研究論文が発表され続けてきた⁽¹⁰⁾。冒頭の二語(enma alis「上で―のとき」)から「エヌマ・エリシュ」と呼ばれるこの神話は、ニネヴェのアッシュルバニパル王(前六六八―六二六年頃)の王室図書館から出土したものに、後にメソポタミア各地で発見された数枚の断片が付け加えられ、今日では「七枚の粘土版、全一〇五三行」⁽¹¹⁾からなる全容が略明らかにされている。物語のあらすじは次のようなものである。

〔第一部〕

上述したように、冒頭の部分ではバビロニアの神々の系譜(神統記)が語られている。

上では、天がまだ命名されず、

下では、固い大地がまだ名前と呼ばれなかった時、

神々の男親である原初のアプスーと、
神々全てを生んだ、母なるティアマトだけがいて、
彼らの水(淡水と海水)が混じり合い――
やがてその中に神々が形作られた。
まず最初に、ラフムとラハムが生まれ、彼らの名前で
呼ばれた。

ついで、アンシャルとキシシャルが生まれ――
彼らの長子としてアヌが生まれ――

アヌもまた彼自身と生き写しのヌデインムドを生んだ
(一・一一一―一六)。

このヌデインムドに代表される若い神々が大勢寄り集
まって、「天界の家」を攪乱し、喧騒で満たしたので、
アプスーはティアマトに彼らを滅ぼすよう提案する。し
かし、「母なる」ティアマトが異議を唱えている間に、
「至高の知恵を具え、技に優れ、機転に富み、何事も知
り尽くしている」エア(ヌデインムド)がアプスーを殺
してしまふ。そして、エアはアプスーの上に住居を建て、
その壮麗な聖所の中で妻ダムキナと交わり、彼らの長子
であるマルドゥクを生む。

マルドゥクの姿態は魅惑的で、その瞳はきらきらと輝
き――

他の神々よりはるかに気高く、全ての点で秀でていた。
彼の手足は想像を絶して見事であり――

彼の目は四つ、彼の耳も四つあり、
彼がその唇を動かすと、炎が燃え上がった(一・八七
―九六)。

ついで、夫のアプスーを殺されたティアマトが無敵の
武器に加えて、十一頭の怪物や怪獣を作り、第二の夫キ
ングウを総司令官に任命して、アンシャル、アヌ、エア
達に攻撃をしかけてくる。しかしこの時、弓矢、鉾
Eggs、電光、燃え上がる炎、網、四方の風、凶暴な風、
洪水を伴う嵐、「虐殺者、無慈悲な者、踏みこむ者、
飛翔する者」が引く馬車等々を駆使してティアマトに立
ち向かい、彼女を殺害し、その軍勢を打ち破り、捕縛し
たのは一番年若いマルドゥクであった。

かくして、アンシャルの勝利――
ヌデインムドの望みは、勇敢なマルドゥクによつて成
就した(四・一二五―一二六)。

〔第一部〕

勝利者となつたマルドゥクは殺害したティアマトの死体を二分して、天地の創造に着手する。

彼（マルドゥク）は彼女（ティアマト）をまるで貝のように引き裂き、

その半分を高く掲げて空とし――
（その空に、諸々の星座を配置して）年、月、日々を定めた。

彼はまた木星 *Nebiru* の位置を定めて、
全ての星が運行を誤つたり、怠けたりしないようにした。

――彼は月を輝かせて、夜を委ね、
――太陽に昼を委ねたその後で、
夜と昼との境界を確立した（四・一三七―五・四六）。

この後、マルドゥクはティアマトの唾液から雲を作り、
風を起こし、雨や冷気をもたらし、霧を立ちのぼらせ、
大気圏を支配する権限を掌握する（五・四六一―五二二）。
更に、彼はティアマトの死体の残りの半分から大地を創造する。

彼（マルドゥク）はティアマトの頭を固定して、山を作り、

――彼女の目からユーフラテス河とチグリス河が流れ出るようにし、

――彼女の乳房の上に高い山々を築き、
（そこに）井戸を掘って、水を導き出し、

彼女の尻尾をひねって、それを「大いなる帯」
Dunaj⁽¹³⁾に結んだ（五・五三―五九）。

マルドゥクは天と地を創造した後、捕縛されていた十頭の怪物や怪獣を引きずり出してその像を作り、アプスーの門に置いて言った。「これは決して忘れられることのない印としよう」（五・七五―七六）。そして、全ての神々はマルドゥクによる天地の創造とその管理の見事に驚嘆し、彼に敬意を表すために進み出て、その足に口付けをして叫んだ。

彼（マルドゥク）こそ王だ（五・八八）。

〔第二部〕

ついで、マルドゥクはティアマトの総司令官であつた

キングウの血から人間を創造する。但し、この人間の創造という大事業はマルドゥクだけではなく、他の神々(アヌンナキともイギギとも総称される神々やエア)が協力した形でなし遂げられている。

彼ら(神々)はキングウを縛り上げ、エアの前に引き据えた。

彼らは彼の有罪を宣告し、彼の血管を切断した。

彼らは彼の血から人間を創造した。

——その仕事は想像を絶する難事業で、マルドゥクが巧妙に計画を建て、ヌディンムドが完成した(六・三一―三八)⁽¹⁴⁾

〔第四部〕

更に、マルドゥクはバビロンとその主神殿エ・サギラの造営を提案し、全ての神々がマルドゥクへの感謝の印としてその労役に従事する。

アヌンナキは道具を打ち振り、一年かかって煉瓦を作った。

二年目には——アプスーと等しくなるように、エ・

サギラの頂きを高く積み上げた。

(また)ジグラットを築き、その高さもアプスーと等しくし、

彼らはその中にマルドゥク、エンリル、エアの住居を設けた(六・五九―六四)。

〔第五部〕

最後に、バビロンに造営されたエ・サギラの竣工祝賀会が催され、全ての神々がその地に参集する。彼らは酒を飲み、御馳走を食べ、歓楽の限りを尽くした後で、アヌがマルドゥクの弓を取り上げ、「この弓は私の娘であり——これからは『弓星』として空に輝くことになるだろう」と宣言する。⁽¹⁵⁾ ついで、アンシャルが音頭をとる形でマルドゥクの五十の名前が唱えられ、「(祖)父であるアヌが彼の誕生した時に名づけたマルドゥク」(六・一二―一三)以下連綿とその目録が続く。恐らく、この五十の名前の列挙はハンムラビ(前一七九二―一七五〇年頃)による周辺の都市国家への侵略と征服によって、それらの地で崇拜されていた神々がバビロンの主神であったマルドゥクに習合された歴史的事実を反映していると思われるが、⁽¹⁶⁾同時にそれらの名前は——少なくとも、こ

の神話が朗唱されていた時代に——マルドゥクがいかなる神、いかなる機能を有するものとして受入れられていたかを示している。例えば、マルドゥクは本来は農耕神もしくは太陽神であったと考えられているが、「エヌマ・エリシュ」の中で彼が果たしている中心的役割は明らかに嵐の神エンリルのものであり、また戦神としての一面も強調されている。⁽¹⁷⁾ いま試みに五十の名前をその機能や神性で分類するならば、次のようになるであろう。

一、農耕神（豊穰神）——マルドゥク、アサル、ジク、エンビルル、エパドゥン、エンビルルグガル、ヘガル、ギル、ズルムという名前で呼びかけられる時、彼（マルドゥク）は「穀物とハーブの創造者、野菜を生育させる者」（七・二）「豊穰と富裕と豊作の主、富を与え——黍をもたらし、大麦を育成する者」（七・六五―六七）「人々のために豊穰をもたらし——広大な大地に雨を降らせ、野菜を供給する者」（七・六八―六九）と称賛されている。⁽¹⁸⁾

二、太陽神（光明神）——マルドゥク、アサルルドウ、アサリアリムヌンナ、ナムルという名前で呼びかけられる時、彼（マルドゥク）は「彼こそは太陽の子、神々の中で最も輝かしい者、彼の光明の中を人々は永遠に歩

む」（六・一二七―一二八）「彼こそ神々の光」（六・一四八）「我々の道を照らす光明の神」（六・一五六）と形容されている。⁽¹⁹⁾

三、天候神（嵐の神）——マルドゥク、ジグ、ヘガル、キンマ、アツドゥという名前は彼（マルドゥク）の武器が「大洪水」（六・一二五）であり、彼自身が「爽やかな息吹の神」（七・二〇）「広大な大地に雨を降らせる者」（七・六九）「神々が暴風雨の如く恐れる者」（七・一〇八）であることを表し、「彼が（雲となって）全空を覆い、彼の情け深い声（雷鳴）が大地の上を漂い、そして地上に雨がもたらされますように」という祈願の対象になつている。⁽²⁰⁾

四、治癒神（呪術者）——ナムテイツラク、トゥトウ、アガグ、トゥクとしての彼（マルドゥク）は、「生命を維持する神——滅び去った神々をあたかも自ら創造したかの如く復活させ、聖なる呪文で死せる神々を甦らせる主」（六・一五一―一五三）「呪文をあみ出し、神々を休息させる者」（七・一一）「聖なる呪文の主、死者を甦らせる者」（七・二二六）である。⁽²¹⁾

五、戦神——マルドゥク、アサルルドウ、ナムテイツラク、ジャズ、ジスイ、シュリム、スフグリム、ザフリ

ム、ザフグリム、シルシル、ルガルアブドゥブル、イルキング、キンマ、ギビル等々と呼ばれる彼(マルドゥク)は、「神々と大地の守護神として、壮烈な一騎討ちを繰り広げ、我々の危機を救った力強い指導者」(六・四一四八―一五〇)「その武器で敵を根絶する者」(七・四三)「諸々の敵を戦場で破滅させた者」(七・五六)である。

六、万物の創造者——マルドゥク、マルツカ、アギルマ、ムンム、ギシュヌムナブ、エシズクルと呼びかけられる時、彼(マルドゥク)は「万物の創造者」(六・一三三)「天地の創造者」(七・八六)「全ての人間を創造し、四方界を創設した者」(七・八九)である。

ついで、「エヌマ・エリシュ」は父なるエンリルが「彼(マルドゥク)が天の領域を創造し、固い大地をも形作ったので、彼(エンリル)自身の称号である『国々の主』Lord of the Landsを与え」、更にエアも「彼(マルドゥク)はまさしく私と同じなので、彼の名前をエアと呼ぼう」(七・一三五―一四〇)と宣言し、この段階でマルドゥクがシュメールの三主神の内エンリルとエアの神性や機能をも吸収したことを暗示して終わっている。

(三)

前節で要約した「エヌマ・エリシュ」の第一部で語られている神々の系譜が、恐らく「ダウンヌの神統譜」や「クマルビ神話」を経由してギリシアに伝わり、その地でヘシオドスの『神統記』に多大の影響を与えたことは、今日の学界における定説となつている。⁽²²⁾

一方、黄帝伝説を構成している史料の中にこの種の系譜を採求するならば、それは比較的晩出の『史記』五帝本紀と、更に(司馬遷が五帝本紀を編纂した際、「その文雅馴ならず」切り捨てた部分を唐代の司馬貞が補足した)三皇本紀の中にかなり簡略化された形で見出すことができる。すなわち、後者は黄帝に先行して三皇——「太皞庖犧氏(伏羲、伏羲、伏羲とも表記する)」「女媧氏」「炎帝神農氏」が王位に就いたが、伏羲氏(以下この表記に統一する)と女媧氏は共に「木徳」、神農氏は「火徳」の王であったと記している。このため、司馬貞は女媧氏も木徳の王であるのは「思うに、伏羲氏の後、すでに数世を経て、五行が一巡してまた木徳に戻ったのである」と推測しているが、むしろこの場合の伏羲と女媧は共同統治者であり、水界に君臨する始源の神々で

あつたと考えた方が妥当であろう。というのも、彼らはしばしば「蛇身人首」「龍身蛇軀」であるといった具合に、水界の生物である龍蛇の類と結合していることが明記され、また漢代以降の画像石や帛画の中ではその二本の尻尾を交わらせて、夫婦神として描かれているからである。⁽²³⁾

更に、三皇本紀はこの伏羲と女媧を継いで炎帝神農氏（とその子孫）が王位に就き、およそ八代、五百三十年で「軒轅（黄帝）が興った」と記して五帝本紀につないでいる。

続く五帝本紀では、「神農氏の世衰う。諸侯あい侵伐し、百姓を暴虐するも、神農氏征すること能わず。ここに於いて、軒轅干戈を用うることを習い、以て不享を征す。諸侯みな来たりて賓従す。——軒轅乃ち徳を修め、兵を振へ、五気を治め、五種を藝え、萬民を撫し、四方を度り、熊・羆・貔・貅・貔・虎に教えて、以て炎帝と阪泉の野に戦う。三度戦いて、しかる後にその志を得たり。蚩尤乱を作し、帝命を用いず。ここに於いて、黄帝乃ち師を諸侯に徴し、蚩尤と涿鹿の野に戦い、遂に蚩尤を禽にして殺す。諸侯みな軒轅を尊びて天子となし、神農氏に代ゆ。これ黄帝たり」と結んでいる。

従つて、ここに描かれている神々は、第一世代のアプスーとティアマト（淡水と海水）には「蛇身人首」の伏羲と女媧、第二世代のラフム・ラハム、アンシャル・キシャル、アヌ、エアには炎帝神農氏（とその子孫）、そして第三世代のマルドゥクには黄帝がそれぞれ対応し、世代交代を繰り返すという形で一種の神統記を形成している。しかも、この世代交代のための戦いでは、諸々の動物や怪獣・怪物の他、雨や風、雲、霧、洪水、干魃といった自然現象も駆使されて死闘が繰り広げられ、最終的に第三世代（黄帝軒轅氏）が勝利を収め、神々もしくは諸侯に推戴されて王位に就くといった具合に、「エヌマ・エリシュ」のそれとの顕著な、複数の類似を示しているのである。

ついで、「エヌマ・エリシュ」の第二部はマルドゥクが敗者となったティアマトの死体から天地を創造したことを物語るが、黄帝伝説の場合、そのテーマは次のような史料の中に——極めて歴史化され、道家的色彩を施されながらも——見出すことが可能である。すなわち、『淮南子』俶真訓は「神農・黄帝に至るに及びては、大宗を剖判し、天地を竅領し、九竅に襲り、九慾を重ね、陰陽を提挈し、剛柔を搏挽し、萬物百族を枝解葉貫

し、各々をして經紀條貫有らしむ」と記し、覽冥訓が「昔、黃帝の天下を治むるや、力牧・太山稽之を輔け、以て日月の行を治め、陰陽の氣を律し、四時の度を節し、律歷の数を正し、男女を別ち、雌雄を異にし、上下を明らかにし、貴賤を等しくし、強をして弱を掩はず、衆をして寡を暴げざらしむ。――是に於いて、日月は精明に、星辰は其の行を失はず、風雨は時節あり、五穀は登^と孰^{じゆく}す」と記しているのがそれである。⁽²⁵⁾ いずれにしても、黃帝は(時に神農とペアを組み、時にその家臣の協力を得て)天と地を管理し、日月星辰の運行を定め、万物百類の区分を明確にし、また相互に脈絡があるようにして、天界と地上に整然たる秩序をもたらし、マルドゥクと大同小異の創造神である。

但し、マルドゥクがティアマトの死体を二分して天地を創造したというモチーフは、黃帝の場合には(ティアマトに対応する)女媧との関係ではなく、むしろその敵対者である蚩尤や形天(一説に形夭)といった怪物・怪物⁽²⁶⁾とのそれにおいて断片化し、変形した形で伝承されている。例えば、時代は下るが『路史』後紀四は黃帝が「蚩尤を中冀に執え――身首異處(に別ちて葬る)」と記し、一方、『山海經』海外西經は「形夭は(黃)帝

と神(の主座)を争う。(黃)帝その首を断ち、之を常羊の山に葬る」と記す等、黃帝の敵対者はしばしば「身首異處」、すなわち首と体を二分した状態で殺されている。しかも、蚩尤には『山海經』大荒南經に「宋山――の楓木は、蚩尤がその桎梏を棄てし所」という記述があり、郭璞が「蚩尤は黃帝の得るところとなる。械してこれを殺す。すでにその械を摘棄するに、化して樹となるなり」と注を加えている。一方、蚩尤と同じく黃帝の敵対者であったと思われる夸父の場合にも『山海經』海外北經に「夸父は日と入日を逐走し――道に渴して死す。その杖を棄つるに、化して鄧林⁽²⁷⁾となる」という記述があり、一種の死体化生神話が残されている。楓木にせよ鄧林にせよ、マルドゥクがティアマトの死体から創造した天と地に較べるならば余りに卑小ではあるが、ともあれこれらの記述の中には黃帝の敵対者が殺され、その死体が二分され、更にその死体(もしくは持ち物)がある種の植物に化生したという創造神話の残影が認められよう。

続いて、「エヌマ・エリシュ」の第三部はマルドゥクがキングウの血から人間を創造することを思い立ち、エアを始めとする複数の神々の協力によってその大事業を

成し遂げたことを物語る。一方、黄帝伝説にも「黄帝は陰陽を生じ、上駢は耳目を生じ、桑林は臂手を生ず。此れ女媧の七十たび化する所以なり」(『淮南子』説林訓)という史料があり、複数の神々が人間を創造したことが明記されている。但し、注意しなければならないことは、ここで人間の創造に直接関与しているのは三柱の神々(黄帝、上駢、桑林)だけであり、その身を「七十たび変じて造化した」(高誘注)女媧は前三者とは別格の扱(28)いを受けていることである。従って、私自身はこの「女媧の七十たび化する所以なり」という語句は——『風俗通義』(『太平御覧』卷七八引)の中で彼女が黄土から人を作ったとする記述とは全く相反してはいるが——人間の創造に際して、女媧がその体を(キングウの血と同じく)材料に用いられたことを示しているのではないか、いいかえれば、女媧はその身を七十たび切断され、七十たび化することによって、人間をも含む万物百類に転身したのではないかと考えている。実際、『山海経』大荒西経には「神十人有り、名づけて女媧の腸という。化して神となり、栗廣の野に處る」という記述があり、「女媧は古の神女にして帝なる者、人面蛇身、一日の中に七十変す。その腹化して此の神となる」という郭璞の注に

依拠するならば、彼女の腸(腹)以外の体の部分からは人間が創造されたとしても何の不思議もない。恐らく、始源の存在であった女媧には、(29)万物を生み出すために殺されるティアマトにもハイヌヴェレにも通じる女神としての一面があり、(30)『淮南子』説林訓ではその内の人間への転身だけが強調されたのであろう。

「エヌマ・エリシュ」の第四部では、マルドゥクがバビロンという都市の造営を神々に提案し、後者によってその地に数々の神殿や聖所が建立されたことが物語られている。但し、バビロンやマルドゥクの主神殿エ・サギラ、旧約聖書の「バベルの塔」のモデルとなったジグラットに関する伝承は、中国に伝来して『山海経』海内西経や『淮南子』墜形訓に見出される崑崙神話となり、(31)黄帝伝説とは別の発展を遂げたと思われるので、ここでは触れない。

最後に、「エヌマ・エリシュ」の第五部は、マルドゥクを讃えるために五十の名前が列挙されて終わるが、それらをマルドゥクの機能もしくは神性として分類するならば六項目(農耕神、太陽神、天候神、治療神、戦神、万物の創造者)に要約できることは上述したとうりである。この六項目に対応するものとして、黄帝伝説の史料

に見出される記述としては次のようなものがある。

一、『管子』軽重戊に「黄帝の王たるや、山を童にし澤を竭し——以て民の利となす」という記述があり、

『史記』五帝本紀の「(黄帝は)五氣を治め、五種を甄え

——時に百穀草木を播く」(『大戴礼記』五帝徳篇に略

同文あり)とか、『淮南子』覽冥訓の「昔者、黄帝の天

下を治めるや——風雨は時節あり、五穀は登孰す」と

いう記述と共に山林を伐採し、湿地帯を開拓し、五穀の

生育に努める農耕神(豊穰神)としての黄帝の機能が表

明されている。⁽³²⁾

二、かつて、高木敏雄氏は『山海経』大荒北経の中で黄

帝が女魃ばつという干魃の神を使役していることに注目し、

それは黄帝自身が灼熱の太陽であることの一表象であり、

「黄」という文字も太陽と解されるとして「黄帝は太陽

神である」と断定したが、⁽³³⁾同じく鉄井慶紀氏も『山海

経』海外西経、『史記』天官書、封禪書等々を挙げ「黄

帝は龍であり、龍蛇と太陽神との関連伝承から黄帝は太

陽神である」と述べ、更に『山海経』『世本』『国語』晋

語等に「黄帝を頂点とする系譜図が記されている」のも、

「黄帝が日神であるがゆえであろう」と推定する。⁽³⁴⁾なお、

私自身は『史記』封禪書、孝武本紀などに黄帝と弓との

関係が強調されているところから、黄帝は弓の名手であり、太陽神、光明神でもあるギリシア神話のアポロンや高句麗の始祖朱蒙にも通じる一面があつたものと考えている。

三、『春秋左氏伝』昭公十七年に「昔、黄帝氏は雲を以

て紀す。故に雲師となりて、雲もて名づく」とあり、

『莊子』大宗師篇では「黄帝は之(道)を得て、以て雲

天に登る」、「韓非子』十過篇では「昔者、黄帝は鬼神を

泰山の上に合す——風伯進み掃い、雨師道に灑ぐ」、

『淮南子』覽冥訓では「昔者、黄帝の天下を治めるや——

風雨時節あり」とある等、黄帝が雲、風、雨といつ

た大気圏の諸現象を(時に家臣として)自在に操る天候

神(嵐の神)であつたことは明らかである。⁽³⁵⁾

四、黄帝が治癒神としての機能を有していたことは、

『黄帝内経』を始めとして彼の名前を冠した多くの医業

書が存在していたこと、更に『帝王世紀』(『太平御覧』

卷七九引)の中では「百草を嘗味して医療を創始した」

と記されていることなどからも疑う余地はない。⁽³⁶⁾また、

古代において医療と密接に結び付いていた呪術に関して

も、『史記』封禪書、孝武本紀に黄帝が封禪を行い、仙

術を体得して不死となり、昇天したことが見えること等

から、黄帝は「神仙術（呪術）の創始者」でもあったと目されている。⁽³⁷⁾

五、『山海経』大荒東経、大荒北経、『逸周書』嘗麥解、『國語』晋語、『呂氏春秋』蕩兵篇、『史記』五帝本紀、『大戴礼記』五帝德篇、『淮南子』兵略訓、『列子』黄帝篇、『述異記』、『帝王世紀』等々に黄帝と一連の敵対者（炎帝神農氏、蚩尤、夔、形天、夸父）との壮絶な戦いが繰り返し記述され、アン・ピレルは「黄帝の原初形態は戦神であった」と断定している。⁽³⁸⁾

六、黄帝が万物の創造者であることは、『管子』五行篇、『呂氏春秋』古楽篇、『世本』作篇等々に音楽を始めとする自然界、人間界のあらゆる技術や器物の発明者として——文化英雄として明記されている。例えば、錢穆氏は黄帝（もしくは彼の家臣）が制作、発明したものとして（イ）天文曆法——占日、占月、占星気、律呂、甲子、算数、（ロ）衣食住行——衣裳、飲食、宮室、舟車、（ハ）武器と文字——弓矢、鼓、指南車、文字と圖、（ニ）その他を分類、列挙しているが、かかる文化英雄の発生は「（万物の創造者である）至高神が人間化することによって生じる変形や派生物」であることがエーレンライヒの「神々と文化英雄たち」という論文の中で論

証されている。⁽⁴⁰⁾

以上、「エヌマ・エリシユ」を五つの部分に分け、その各部分に対応する黄帝伝説の史料を列挙してきたが、この他にも両者には次のような対応もしくは類似が見出される。

マルドゥクは誕生した時に二重の神威が授けられ、四つの目、四つの耳があったとされるが（一・九一―九五）、『尸子』（『太平御覽』卷七九引）の中では黄帝も「四面」であったと記されている。但し、この「黄帝四面」という語は『尸子』の中で「黄帝は己に合う者四人を取り、四方を治めしむ。（四方は）計らずしてかない、約さずしてなる。此れを四面という」と儒家流に解釈されているが、『帝王世紀』（『通鑑外記』引）には「黄帝四目」という記述があり、更に黄帝の史官蒼頡（後述）や最も手強い敵対者蚩尤も「四目」であったとする史料があり、黄帝とその周辺には「四面」「四目」という語が頻出する。

また、マルドゥクが天地を創造した後、彼に敵対した十一頭の怪物や怪獣の像を作り、後世の見せしめとしたが（五・七三―七八）、『竜魚河図』（『太平御覽』卷七九引）も「蚩尤没して後、天下ふたたび擾乱して寧からず、

黄帝遂に蚩尤の形象を画し、以て天下を威す」という大同小異の記述を残している。

更に、マルドゥクは画像の中でムシユフツシユと呼ばれる「混合生物」Mischwesenと結び付いているが、後者の獍猛性、凶暴性は四種の動物（龍、ライオン、猛禽、サソリ）の力を合わせ持つことよって象徴されている。⁽⁴¹⁾一方、黄帝に侍る応龍は「水を蓄えて」蚩尤と戦う凶暴な戦士であり（『山海経』大荒北経）、また「蚩尤と夸父を殺す」残酷な死刑執行人（『山海経』大荒東経）でもあった。なお、大荒東経の郭璞の注によれば「応龍は龍の翼ある者」であり、これも一種の混合生物であったことが明らかにされている。

最後に、マルドゥクにはボルシツパやニネヴェで崇拜されていたナボという息子がいて、両者の力は相拮抗するものであったことが知られている。ナボは「くさび、あるいは硬筆」⁽⁴²⁾をそのシンボルとする文字の守護神として名高いが、黄帝にも蒼頡と呼ばれる家臣がいて、『淮南子』本経訓や『世本』作篇、許慎の『説文』序等々は「黄帝の史（官）蒼頡が——初めて書（契）を造った」ことを記している。しかも、『春秋緯元命苞』という緯書には「蒼帝史皇氏、名は頡——四目靈光、実に睿徳

ありて、生まれながらにして能く書し——文字を創る」という記述があり、蒼頡は必ずしも黄帝の家臣ではなく、むしろ黄帝と同格の古帝王もしくは神であったことが窺われる。恐らく、黄帝は——マルドゥクが文字の守護神であったナボを息子としたのと同様に——書（契）の創造者であった蒼頡を家臣とすることによって、古代において「天が粟を雨ふらせ、鬼が夜哭く」（『淮南子』本経訓）ほどの大事件であった文字の発明を自らの神性の内に取り込んだのであろう。⁽⁴³⁾

(四)

以上、見てきたように「エヌマ・エリシユ」と黄帝伝説、もしくはその主人公であるマルドゥクと黄帝との類似は顕著であり、複数かつ微細にわたっている。実際、「エヌマ・エリシユ」は五つの部分から構成されているが、黄帝伝説（の史料）の中にそれら全てに対応する記述が存在し、しかもマルドゥクと黄帝の機能や神性も到底偶然の所産とは考えられないほど合致していることは上述のとうりである。

一方、黄帝伝説には「エヌマ・エリシユ」の中にその対応する記述を見出すことのできない幾つかのモチーフ

フがあることもまた事実であり、両者の対応や類似は必ずしも決定的、全面的ではない。例えば、『山海経』西山経には「黄帝乃ち崑山^{みつ}の玉榮を取りて、之を鐘山の陽に投ず」という記述があり、同じく『莊子』天地篇、『淮南子』人間訓も黄帝と玉とを結び付け、また『莊子』天運、天下篇、『呂氏春秋』古楽篇、『世本』作篇等々は黄帝と音楽（咸池の楽、律呂等）とを結び付けているが、「エヌマ・エリシユ」にも、その他のマルドゥク⁴⁴の資料にも玉や音楽に関するモチーフやエピソードを見出すことはできない。更に、黄帝の正妃西陵氏嫫祖^嫫（嫫祖、累祖、雷祖とも表記する）や次妃嫫母^嫫が各伝承の中で重要な役割を演じ、天界の女神達——女魃（前述）や（九天）玄女（『黄帝玄女戦法』）が戦神としての黄帝を援助するなど、女性的要素・女性原理が特筆されているのも黄帝伝説だけの特色である。⁴⁵

従って、私自身は次のように考えている。すなわち、前二千年紀には早くもバビロンで成立し、しかもその地の新年祭に於いてはるか後世まで朗唱され続けた「エヌマ・エリシユ」が、周辺の国々（ヒッタイト、ウガリット、イスラエル、ギリシア）の神話・叙事詩に多大な影響を与えたことは上述したが、同様に東方では天文学や

暦法、金属器等々の知識や技術と共に春秋・戦国時代の中国にも伝来し、黄帝伝説という形で諸文献の中に——エウヘメリズムの洗礼を受け、教訓や風刺等を語る寓話に作り換えられながらも⁴⁶——その痕跡を止めることになった。但し、この時までには中国の人々は既に何等かの形でマルドゥクに匹敵する彼ら自身の至高神（創造神）を所有し、信仰していたにちがいない。今、その神が上帝もしくは皇天上帝と呼ばれる存在であったのか、あるいはある特定の地方で崇拜されていたより具体的な始祖神であったのかを断定することはできないが、中国の人々は彼らの神とマルドゥクとの間に類似点や関連性を見出し、強いインパクトを受け、広大な地域に分散する「きわめて多様な古帝王（もしくは神）に関する諸伝承の一元化」⁴⁷を計ったのであろう。すなわち、彼らは彼らの神とマルドゥクとを習合し、同一視することによって「エヌマ・エリシユ」を受入れ、また彼らの創成神話として新たに黄帝伝説を創作したのである。その結果、「エヌマ・エリシユ」と黄帝伝説、もしくはマルドゥクと黄帝との対応や類似は顕著であると同時に、決定的、全面的ではないという現象を生ずることとなった。いいかえれば、黄帝伝説の中には「エヌマ・エリシユ」に代

表される外来の要素と土着の要素とが混在しているのであつて、マルドゥクに酷似する黄帝は「黄帝四面」の内の西方に付いている一面であり、玉や音楽、更には女性原理とも結合した黄帝は他の三方——東、南、北に付いている面だったのである。⁽⁴⁸⁾

注

- (1) 津田左右吉『道家の思想とその展開』岩波書店、一九三九年。
- (2) 楊寛「黄帝与皇帝及上帝」『古史弁』第七冊上篇、開明書店、一九四一年。
- (3) 森三樹三郎『支那古代神話』大雅堂、一九四四年、三〇頁。
- (4) 丁山『中国古代宗教与神話考』龍門聯合書局、一九六一年、四二〇頁。この他、郭沫若(『中国古代社会研究』科学出版社、一九六四年他)や袁珂(『中国神話の文化人類学的研究』平河出版社、一九九〇年)といった諸氏もこの黄帝即上帝、皇天上帝説の立場をとる。
- (5) 白川静『中国の神話』中央公論社、一九七五年、二三四～二五二頁。氏は「黄帝を始祖とする古帝王の系譜化は(齊において)陰陽五行説を唱えた鄒衍・田駢の徒の思弁になるものではなく」、むしろその成立に関しては「西方の知識の受け容れ者であつた」秦や晋を重視すべきであり、更に「黄帝はもと崑崙説話と分離しがたいもの

であり、その神殿も——西方のジグラット形式のものとしてたのであろう」と述べ、黄帝伝説の西方起源説を暗示している。

- (6) 御手洗勝『古代中国の神々』創文社、一九八四年、二六五頁。但し、氏はこの黄帝に関する「最も有力な説」に対しても、鉄井慶紀氏の黄帝即太陽神説(前掲書参照)に対しても繰り返し批判的立場を表明している。「黄帝の原初的性格」(栗原圭介先生頌寿記念『東洋学論集』汲古書院、一九九五年)一四一～一六七頁参照。

- (7) ジョン・グレイ、森雅子訳『オリエント神話』青土社、一九九三年、五四～五五、二〇〇～二三五、三四七～三五〇頁参照。なお、「エヌマ・エリシュ」の成立年代に関してはハンムラビの属するバビロン第一王朝時代に想定する意見が有力であつたが、最近では前二千年紀半ば以降とする意見も出ている。例えば、Haltmut Schmckel, *Mesopotamian Texts, in Near Eastern Religious Texts relating to the Old Testament* (ed. by Walter Beyerlin), London, 1978, p.81は「前二一～二〇世紀」、月本昭男「古代メソポタミアの創成神話」(『創成神話の研究』リットン、一九九六年、二六頁)は「前一四世紀頃」という説をとる。
- (8) 月本昭男、前掲論文、五一頁参照。「クマルビ神話」に関しては、Albrecht Goetze, *Kingship in Heaven, the same, The Song of Ullikummi, in Ancient Near Eastern Texts relating to the Old Testament*, (ed. by J. B. Pritchard), Princeton, 1969, pp.120～125. メソポタミアとギリシアに關しては、Charles Penglase, *Greek Myth and Mesopota-*

mia, London and New York, 1994. 「デュアンヌの神統譜」に關しては、W. G. Lambert, P. Walcott, *A New Babylonian Theogony and Hesiod*, *Kadmos* 14 (1965), pp. 64-72.

(9) なお、マルドゥクと黄帝との比較は、かつて貝塚茂樹、鉄井慶紀両氏によつて試みられたことがあるが、その際彼らはいくまで現象論的比較に終始して、伝播論的比較の立場に立つことを否定している。例えば、貝塚氏は「古代オリエント諸国の伝説のうち、古代中国の伝説にひじょうによく似ているものがあつたとしても、それからただちに神話・伝説の直接のあるいは間接の伝播として説明しようとするわけではない。近似したテーマ、同種の伝説は、それを生み出すべき類似的の宗教的儀礼の、背後における存在を想定させるといふより以上のことを主張するものではない」(『神々の誕生』『貝塚茂樹著作集』第五卷、一九七六年、七八頁)と述べ、鉄井氏はミルチア・エリアーデが「マルドゥクとティアマトの闘争神話を宇宙開闢神話として解釈している」ことに依拠して、黄帝と蚩尤の闘争神話も同じ性格を有することだけを論証している(前掲書、三五〇～三六五頁)。一方、私自身はこれまでもしばしば主張してきたように、古代オリエントと中国の神話や伝説の類似は前者の文明の東漸と無関係ではあり得ず、いわば伝播と影響によるものであると考へている。従つて、以下に試みるのは——貝塚、鉄井両氏とは対照的に——伝播論的比較であり、「エヌマ・エリシュ」の一部ではなく、その全体と黄帝伝説と

の比較である。

(10) ショーミン・スミス以後の翻訳や研究者に關しては、L. W. King, *Enuma Elish, The Seven Tablets of Creation*, London, 1902, XXVI-参照。また、King以後のものに關しては、後藤光一郎「エヌマ・エリシュ」(杉勇編『古代オリエント集』、筑摩書房、一九七八年)一〇五頁参照。

(11) 月本昭男、前掲論文、二六～二七頁参照。なお、「エヌマ・エリシュ」に關する以下の記述は主として E. A. Speiser, *The Creation Epic, in Ancient Near Eastern Texts*, pp. 60-72, A. K. Grayson, in id., 1969, 3rd ed., pp. 501-503 の翻訳に依拠したが、その他疑問があつたり、不明の箇所では次のような研究書を参考にした。S. Langdon, *The Babylonian Epic of Creation*, Oxford, 1923. A. Heidel, *The Babylonian Genesis*, Chicago, 1942. W. Lambert, *Enuma Elish, the Babylonian Epic of Creation, the Cuneiform Texts*, Oxford, 1966. (福原信義訳「バビロニアの創造神話 *Enuma Elish*」『大阪外国語大学学報』三四(三七)、S. Dally, *Myth from Mesopotamia*, Oxford and New York, 1989, pp. 227f. Th. H. Gaster, *The Oldest Stories in the World*, New York, 1952. (矢島文夫訳『世界最古の物語』社会思想社、一九七三年)、後藤光一郎「エヌマ・エリシュ」(前掲書)、饒宗頤編訳『近東開闢史詩』新文豐出版、一九九〇年。

(12) ヌディンムドは大地と水の神エア(エンキ)の別名であり、アヌ、エンリルと共にシュメールにおける三主神を構成する。

- (13) Durmah という単語に関しては、Grayson は「大いなる帯」、Lambert は「大いなる臍」、Dally は「宇宙の枷」と訳している。なお、ここではティアマトが尻尾のある魚もしくは龍のごとき姿態であることが明記されている。
- (14) この他の場合にも、メソポタミアでは人間は複数の神々によつて、しかも神々に奉仕するために創造されたことに関しては、月本昭男、前掲論文、二三～二六頁参照。
- (15) アヌが弓(星)を「私の娘」と呼んでいることに関しては、Dally, p.276.
- (16) W. H. Ph. Romer, *Religion of Ancient Mesopotamia*, in *Historia Religionum*, (ed. by C. Jouco Bleeker and Geo Widengren), Leiden, 1969, pp.134～135, Jean Bottero, *Mesopotamia: Writing, Reasoning, and the Gods*, Chicago and London, 1992, p.214.
- (17) トーキルド・ヤコブセン、山室静他訳「メソポタミア」(『古代オリエントの神話と思想』社会思想社、一九七一年)二一〇頁参照。
- (18) この他、マルドゥクが農耕神(豊穰神)であったことは、彼のシンボルが鋤 spade もしくは鉄 hoe であることによつても明示されている。ドミニク・コロン、久我行子訳『円筒印章』東京美術、一九九六年、九六、一〇七、一四七、一五一頁参照。
- (19) 実際、マルドゥクの名前はシュメール語の Amar Utu 「太陽神ウトウの子牛」に由来し(Romer, p.135, Dally, p.274)、また「エヌマ・エリシュ」の中では、彼が誕生した時に父であるエアが「私の小さな息子よ、——太陽よ、天界の太陽よ」(一・一〇一～一〇二)と呼びかけている。
- (20) この天候神というマルドゥクの神性は、ウガリット神話の中ではバアルに受け継がれ、彼はしばしば「雲に乗る者」という形容語で呼ばれている。Arvid S. Kapelrud, *Baal in the Ras Shamra Texts*, Copenhagen, 1952, pp.93～98.
- (21) マルドゥクが呪文を用いて悪魔払いをする神、病気を治す神であったことに関しては、Romer, p.127. なお、マルドゥクと同一視されるアサルヒという神も「神々の呪術者であり、死者を生かす方」であり、「生命の草」を所有していたことに関しては、月本昭男『ギルガメシュ叙事詩』岩波書店、一九九六年、三六三頁参照。
- (22) 注(8)の他、柳存仁「神話與中国神話接受外来因素的限度和理由」(『中国神話與伝説学術研討會論文集』天恩出版社、一九九六年)七頁参照。なお、「エヌマ・エリシュ」(『クマルビ神話』「神統記」に描かれているのは、原初存在である第一世代(夫婦神として描かれること)もあれば、単独神のこともある)が第二世代(単数の場合と複数の場合がある)に打ち負かされ、次いで第三世代に取つて代わられるが、この第三世代の勝利は第一もしくは第二世代から派遣された怪物と死闘を繰り上げた後によつて決定的となるという、かなり定型化された神々の系譜——theogony である。
- (23) 聞一多「伏羲考」(『中国神話』平凡社、中島みどり訳、

一九八九年) 一二頁以下参照。

(24) 上述の五帝本紀の他、『列子』黄帝篇や『韓非子』十過篇にも黄帝が様々な動物、鳥類、鬼神、風伯、雨師等を駆使したという記述があり、一方の蚩尤も『山海経』大荒北経では風伯、雨師を味方に引き入れ、『黄帝玄女戦法』(『太平御覧』卷十五引)では濃霧を起こして黄帝の軍を窮地に陥れている。貝塚茂樹、前掲書、八〇―八二頁参照。

(25) この他、『史記』五帝本紀に「黄帝は――日月、星辰、水波、土石、金玉を旁羅す」(『大戴礼記』五帝徳篇に略同文が見える)とあり、更に『国語』魯語では「黄帝能く百物に成命す」(『禮記』祭法、成命を正名に作る)とある記述も、黄帝が「宇宙の創成」に関与し、「天地の始(祖)神始帝と考えられていた」ことを表明しているといえよう。森安太郎「黄帝伝説」(『黄帝伝説』朋友書店、一九七〇年)一四九―一五〇頁参照。

(26) 蚩尤は「人身牛蹄、四目六手、耳鬚は劍戟の如く、頭に角あり」(『述異記』)、「獸身人語、銅頭鉄額、沙石子を食らう」(『龍魚河圖』)『太平御覧』卷七八引)「八肱八趾疏首」(『初学記』卷九)という怪物であり、しかも「エヌマ・エリシユ」の中でキングウが十一頭の怪物・怪物を率いていたように、七十二人とも八十一人ともいわれる兄弟と徒党を組んで黄帝と戦っている。一方、形天は黄帝にその首を断たれた後、「乳を以て目となし、臍を以て口となし、干戚を操りて以て舞う」(『山海経』海外西経)怪物である。

(27) 『山海経』には海外北経の他に、大荒東経および大荒北経にも夸父の記述があり、ここでは黄帝の神獣であった応竜によつて蚩尤と共に殺されている。なお、『列子』湯問篇では「夸父――道に渴して死し、その杖を棄つ。尸の膏肉の浸すところ、鄧林を生ず」とあり、彼の死体の膏や肉が肥料となり、それが大きな樹林に変じたことが明記されている。

(28) 高誘はこの箇所「黄帝は古の天神……上駢桑林は皆神名。女媧は天下の王たる者なり。七十たび変じて造化す。これ造化治世は一人の功にあらざるを言うなり」と注している。

(29) 『楚辞』天問に「女媧に體あり、孰かこれを制匠せる」という詩句があり、始源の存在であった女媧の体は一体誰が造つたのか問われている。

(30) アードルフ・E・イエンゼン、大林太良他訳「殺された女神」弘文堂、一九七七年。

(31) 拙論「崑崙伝説起源考」『ユリイカ』一九九七年、二九―二。

(32) この他、『呂氏春秋』十二紀、『禮記』月令、『淮南子』時則訓に、黄帝を中央の帝、后土(土神)をその佐神として連記するのも、黄帝の農耕神としての一面を強化する記述に他ならないであろう。御手洗勝『古代中国の神々』(前掲)二六九頁。

(33) 高木敏雄『比較神話学』武蔵野書院、一九二四年、一二五頁参照。

(34) 鉄井慶紀、前掲書、三三五―三四三頁参照。

(35) この他、『穆天子伝』に「吉日辛酉、天子昆侖の丘に
 升り、以て黄帝の宮を觀て、豊隆の葬を封ず」(顧実『穆
 天子伝西征講疏』台湾商務印書館によれば、豊隆即ち雲
 師もしくは雷公は黄帝の別名である)とあり、更に『河
 図稽命徴』『河図帝通紀』『春秋合誠図』といった緯書に
 は黄帝が大電光もしくは雷精によって誕生したとか、雷
 雨をつかさどる神であるといった記述が見え、黄帝と雲、
 雷との結合が窺われる。

(36) 森三樹三郎、前掲書、四〇頁、丸山敏秋『黄帝内経と
 中国古代医学』東京美術、一九八八年、三九三頁参照。

(37) 森三樹三郎、前掲書、四〇頁参照。

(38) Anne Birrell, *Chinese Mythology*, Baltimore and London,
 1993, p.130.

(39) 錢穆『黄帝』台湾東大圖書公司、一九七八年、一七一
 二九頁。

(40) 大林太良『神話学入門』中央公論社、一九六六年、一
 二五―一二六頁参照。

(41) ドミニク・コロン(前掲書)二〇四頁、ベヴァリー・
 ムーン編、橋本楨矩訳『元型と象徴の事典』青土社、一
 九九五年、一九五―二〇〇頁参照。

(42) Bottero, p.214, pp.298 ~ 299. 及びジョン・グレイ
 (前掲書)四五―四六、五六頁参照。

(43) 張光直(伊藤清司、森雅子、市瀬智紀訳『古代中国社
 会―美術・神話・祭祀』東方書店、一九九四年、一三頁
 以下)によれば、「文字は権力への道」であり、「文字に
 よる記録には世界を統治するための秘密の鍵が内包され

ていた」のである。

(44) 蕭兵『黄帝為黃玉之神考』(『楚辭与神話』江蘇古籍出
 版社、一九八六年)三九二―四二四頁参照。

(45) 森安太郎『黄帝伝説』(前掲書)一五一―一五二頁に
 よれば、「軒轅氏黄帝は女君の象徴であり―黄帝を考
 えるのに重要なことは、その女性面にあらねばならぬ」
 という。

(46) 伊藤清司『中国の神話伝説』東方書店、一九九六年、
 六一―七頁。

(47) 白川静、前掲書、二四九頁。

(48) (注) 9. において既に述べたように、私自身はこれ
 まで比較神話学の中でも伝播論的な―汎バビロニア説
 と呼ばれる学説に依拠して、中国神話の復元を試みてき
 た。その際に、最も痛烈であり、当然でもあった批判と
 して「ある特定の類似現象から、直ちに一體の分化とい
 う結論を導き出すべきではなく」、また「中国古代と西方
 の文化の交流の時代や路線、その担い手を掌握しきつて
 いない情形下において、両者の神話・伝説の伝播を説く
 べきではない」とするものが多かった。とりわけ、その
 文化交流の担い手の問題は私にとって全く未解決であっ
 たが、一九九六年、三田史学会シンポジウム「中国の神
 話学の現在」において本論を発表後、小川英雄教授から
 次のようなお手紙を頂戴した。

〔前略〕御発表を聞いている間、エヌマ・エリシユやマ
 ルドゥク崇拜が中国に向けて広まり始めた契機や手段に
 ついて考えていました。図書館があつたニネヴェは前六

一二年に陥落しました。バビロンは前六四八年にはアッシリアによって、前五三九年にはペルシアによって陥落しました。当時、アラム人がバビロニアやアッシリアの世界に商人として、貿易商として入り込んでいました。彼らはアルファベットのアラム語を使うと同時に、楔形文字のアッカド語も知っていました。ニネヴェとバビロンの陥落と共に彼らはエヌマ・エリシュやマルドゥク神話の知識を伴って当時の全オリエント世界に落ち延びました。そのうち、東方に逃れた者たちはペルシア人やメディア人の帝国の時代（前六一四世紀）に、中央アジアや西域に達していたのです。彼らはそこでオリエントの神話を中国に伝えたと信じてよいでしょう。実際、シルクロードのソグド人の文化はアラム系であったことを考えれば、アラム人がその担い手であった可能性も大きいでしょう（後略）

謝して記すと共に、今後の私の研究の支石としたいと考えている。